

会昌の破仏と禪宗

鈴木 哲雄

三武一宗の破仏の中でも、武宗の会昌の破仏は規模と徹底的なことにおいて特に有名である。この破仏が武宗の人となりにおいてなされたことは疑いえない事実であるが、しかしこれだけのことが武宗という人となりだけにおいてなされるはずもなく、そこにはよって来たる原因がいくつか見出せるのである。この原因については、近くは道端良秀『唐代仏教史の研究』中、特に「寺院僧尼の取締と沙汰」に詳しく述べられているし、他に善峰憲雄「唐朝仏教政策私考」、春日礼智「会昌法難の意義」の論文があり、破仏のよって来たる前提となる唐朝の仏教政策について、早く矢吹慶輝『三階教の研究』、塚本善隆『唐中期の浄土教』、山崎宏『支那中世仏教の展開』、近くは滋野井恬『唐代仏教史論』が詳しく、他に吉川忠夫「中国の排仏論」、西村元祐「武周革命における仏教政策とその政治的背景」、竹島淳夫「唐朝玄宗の宗教観と開元の仏教政策」等の論文がある。唐代の仏教政策並びに会昌の破仏の経緯についてはこれらに譲り、禪宗側にあつて

はどのような事情であつたかを探つてみたい。

仏教維持の基本的要件は寺院と僧と経論との三つが備わることであろう。寺院蘭若は僧の生活基盤や布教指導の本拠である。破仏はその生活の場、布教指導の場を根本から破壊し去り、仏教否定を天下に知らしめた。その僧をほとんど全て還俗せしめるといふことは、仏教の伝承を途絶せしめることである。経論の焚焼には仏教の教えそのものを払拭してしまふ意図がある。この三つが備わつた破壊は仏教の生きる余地を全くなくしてしまふものであつた。そして会昌の破仏の場合、それが全国規模で徹底的に行なわれたことで、中国の歴史上類い稀な破仏に展開していったのであつた。『資治通鑑』卷二四八、会昌五年五月条に、「祠部奏す。天下の寺を括るに四千六百、蘭若四万、僧尼二十六万五百」といふ。このような状況下にあつて、禪僧はどのようにに処したのであるうか。その場の情況や個々人の考え方等によつてそれぞれ皆違ふのであるが、少し整理してみよう。

(1)前徴 聖壽恒政（惟政）は武宗が即位するや、「仇を避く」と言つて長安の聖壽寺を去り、終南山に隠れてしまった（宋一）。彼は玄宗朝に入内して法を説き、命ぜられて聖壽寺に住した。それだけに朝廷の内部事情に明るかつたのである。武宗の人となりを見抜いていたのである。

(2)寺院蘭若の破壊 鄭愚「潭州大瀉山同慶寺大円禪師碑銘并序」（全唐文八二〇）に、湖南の瀉山靈祐について「武宗、寺を毀し僧を逐う」といい、『景德伝灯録』巻四では、鳥窠道林及びその弟子会通の住した杭州の招賢寺が廢されたことを述べる。また仏窟惟則の塔は天台山瀑布泉の西、仏窟の本院にあつたが、会昌中に例としてこれを毀し、その院が道門の所有となつたので、碑を今のところに移した（宋一〇）といわれる。寺塔の破壊は全国に及んでおり、寺院から道觀に變じたものもいくらかあるが、通志や地方志の寺觀の項には、しばしば毀されたことが散見せられる。見逃された場合もなかつたわけではない。『朝野僉載』に、湖北江陵の天皇寺には三教殿があつて、孔子像があつたので毀せなかつたといふことが記されているが、この伝でいけば、明皇の金銅像を祠つた開元寺などは、そのままでは廢することができなかつたわけである。資治通鑑の会昌五年七月条に『武宗実録』を引いて、上都東都は每街、寺兩所を留め、每寺僧各三十人を留めた。中書門下は諸道を三等に分け、上は二十人、中は

十人、下は五人の僧を留めることを奏したことをいう。このような例外も置かれたが、或はたとえ見逃された場合があつたとしても、もはや住する環境にはなかつた。ほとんどの僧が皆寺院を去つて還俗した。武宗の命で破壊の対象からはずされた寺に住し得た禪僧は、現在知り得る限り、一人もいなかったと思われる。

(3)還俗隱棲 還俗は仏教彈圧の要件であつたが、一方、仏教へ消費する莫大な費用を、還俗せしめて兩戸税に充て、生産に従事せしめることで税の徵集を増大せしめようとするための意図でもあつた。しかし禪僧としての自覺を持つて事態に対処した人々においては、記録から見ると限り、その意図は達成しなかつたとみられる。その事例を挙げてみよう。

三平義忠（志忠）（七八一—八七二）は宝曆初（八二五）福建の三平山に入り、草を刈つて招提とし、住持して常に三百人いたが、武宗の破仏で三平の深巖に入った（全唐文七九一、王諷「潭州三平大師碑銘并序」）。『祖堂集』巻五では破仏によつて三平山に入ったという筆致である。祖堂集からすれば三平山は「彼海峴、竟絶玄侶」ところとされる。祖堂集は漳州に近い泉州でできたのであるから、三平山を知らぬはずはなく、三平山そのものが辺境の地であつた。そこにも破仏の手は及び、更に深巖に入って隠れたと解すべきである。徳山宣鑑（七八二—八六五）は湖南の豊陽に三十年住したが、武帝の

虔教で独浮山の石室に難を避けた(景一五)。独浮山は大浮山ともいい、豊州西南、石門・武陵・桃源の三県に跨がる山で、そこには自然の石室がある。人目に届かないこの石室に籠ったのである。『宋高僧伝』卷十二では「豊陽に止まり、居ることいくばくもなくして武宗の搜場に属(あた)った」という。徳山は豊州竜潭禅院の崇信に学んだから、そこより数えれば三十年にならう。搜場という言葉から、徳山が特に捜索を受けたように受け取る人もいるが、そうではなく、贊寧の用いた破仏の代替語である。例えば卷十一の蘇州藏真章、卷二十七の呂后文質章、卷三十の元表章をみれば明らかとならう。衡山日照(七五五―八六二)も南嶽の昂頭峯に二十年庵居したが、破仏により深く巖窟に入り、粟を食べ流れを汲んで命を繋いだ(宋一二)。浙江の千頃楚南(八一三―八八八)も深く林谷に隠れた(景一二、宋一七)。また呂后文質(七八―八六一)も浙江の大芙蓉山に隠れ、胎息するのみであった(宋二七)。このようにそこより一層山深く入って難を避けた人もおれば、全く別のところに移った人もいる。洞山は民服にて山西の箕州に隠れた(余靖『武溪集』卷九「筠州洞山普利禅院伝法記」)。湖南から山西まで遠く北に足を延ばして韜晦した例はめずらしい。丹仁は、武宗の激しい破仏に対し、黄河以北の鎮・幽・魏・路州等の四節度使は元來仏法を敬重し、寺を毀さず、僧尼を条流せず、仏法のことは一切動

かさなかつたので、しきりに勅使を遣り勘罰しようとしたが、「天子自ら来りて毀圻し焚焼したまわば、すなわちしかるべし。臣らはこのことをなすあたわざるなり」と(小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第四卷二四六頁、会昌五年十一月三日条)、と伝聞したことを記している。しかし実際は五台山さえ破壊されていたのであるから、伝聞そのままではなかつたろうが、洞山が山西に入った理由とみることも可能である。或は全く別に、箕州には箕山があり、それは伯夷叔齊の隠れたところと目される一つであるが、洞山の、自からを伯夷叔齊に託して述べた心情が訛伝されて、箕州に隠れたということになってしまったとみたならば、奔放な見解に墮するであろうか。洞山はこの時以外北地には行っていないから、全く唐突としか思えないのである。蘇州(嘉禾)藏真(七九八―八七九)も柯山に避けている(景一〇、宋一二)。柯山がわからぬが、もし蘇州の何山のことならば、湖南から江南へと、遠く韜晦したことになる。

(4)依所 芙蓉靈訓は圧迫に抗するだけの力か何らかの手立てを持っていたようで、福州の雪峯義存(八二二―九〇八)は武宗の澄汰に値い、髪を儒冠に束ね、芙蓉山靈訓大師のところに至って(祖七。全唐文八二六、黄滔「福州雪峯山故真覺大師碑銘」)、保護を受けた。既に述べたことがあるので控えるが、雪峯のここでの厳格な生活は、後に彼自身に大きな影響

を与えることとなり、破仏の持つ意味の深刻さを知ることができる。このように保護を得たものとして、福州の亀洋無了（七七七—八六七）もいる。無了は還俗して、檀信徒の迎えに応じ、数家に隠れた（全唐文八二六、黄滔「亀洋盡感禪院東楡和尚碑」中）。大慈寰中（七八〇—八六二）も、「武宗の教を廃するに属り短褐を衣る。ある人が戴氏の別墅に居らしめた」（宋二二）。径山洪諲（一九〇二）は長沙で信士羅晏に遇い、羅晏の家にあって供施を受け、白衣比丘の法を執った（宋二二）。白衣比丘とは『維摩經』の「雖為白衣、奉持沙門清淨律行」という態度をいうのであろう。湖南の瀉山靈祐も、「にわかには首をつつんで民となる。ただ蚩々の輩の出でんことを恐る。識者あり、ますますこれを貴重す」（前掲碑銘）というから、識者から保護を受けていたのであろう。意ある者は隱棲し、朝廷の還俗の意図するところを無視し、それに消極的な抵抗をしていたと言えよう。そしてまたそれを助ける者もあつたのである。

(5) 消息不明 烏窠道林の弟子の会通（景四）のように、招賢寺が廢されたので、衆僧と共に師の塔に礼辭し、その後行方がしれなくなった人もいる。行方のしれなくなった人が記述に残る方が例外で、大部分の人は廢仏によって消息を絶つたのである。ただし会通は烏窠について出家、受戒、嗣法したとされる稀な経歴で、私度が許されたとも思われず、實在

したかどうか疑っている人である。勿論私度がなかったのではなく、避役のための私度僧の横行、それが仏教界の紊乱ともなり、破仏の大きな原因ともなっていたのである。

(6) 外国僧 外国僧は会昌初め以来、容易に帰るを許さず、一旦詔が出て後は還俗せしめ、追うがごとく帰国せしめたようである。「外国僧でも祠部牒なき者は還俗せしめて本国に帰すこととなつた。新羅僧も牒なき者多く、円仁等も亦唐国祠部牒なき故、還俗を免れなかつた」（道端、前掲書一六六頁）。円仁は「会昌元年よりこのかた功德使を経て、状を通じ本国に帰らんことを請い、計るに百有余度なり。（中略）今、僧尼が還俗の難によりてまさに帰国することをえたり。一たびは悲しみ、一たびは喜こぶ」（会昌五年五月十四日条、小野、前掲書一四〇頁）と複雑な心情を述べている。新羅の僧も同じであつたらう。麻谷宝徹を嗣いだ聖住無染（八〇〇—八八八）は会昌五年（祖は六年）帰国した（海東金石苑二、崔致遠「両朝教證大明慧和尚白月葆光塔碑銘并序」）。また雙峯道允も会昌七年四月帰国した（祖一七）。

(7) 経論隱匿 また破仏によって多くの経論も失つた。禪僧ではないが、高麗の元表は「会昌の搜毀に属り、経をもち、華欄木の函をもって盛り、深く石室の中に蔵した」（宋三〇）。しかしこのような例はあつても、多くの経論は灰塵に帰し、特に教宗は壊滅的打撃を受けた。後に五代呉越の天台徳韶は

義寂の要請で忠懿王を動かさし、日本にまで書を求めている。情況は深刻で後々にまで長く尾を曳いていった。

(8) 復僧 宣宗の復興の詔によって、渴を癒すように寺院の建設が始まり、隠棲している僧が迎えられた。自覚ある僧は次々と再出家し、仏教の復興に当った。しかし中には復仏後も再出家せず、在俗のままでも通した人もいる。福州の龜山智真(七八一―八六五)は武宗の澄汰に値って偈二首を徒に示し、白衣であるから解空に墜ち修道が妨げられるものではなく、命を奪われるような破仏ではないと言ひ、宣宗の中興にも復僧しなかつた(景九)。石室善導は湖南の長髯曠の弟子で、沙汰の年中に僧行を行者の姿に改め、沙汰の後に師僧がまた集つても僧とならず、毎日碓を踏んで師僧に供養した(祖五)。龜洋慧忠(志忠)は白衣となり(景三)、龜洋山中の巖穴に住した(前掲「東嶺和尚碑」)。宣宗の中興するに及んで、「上界の道士は録を受けず、成仏の沙弥は戒法を具せず」という古人の言を引いて、偈三首を述べた。偈中「世主の俗に還さしむるに因らざれば、那ぞ鷄群と鶴群とを弁ぜん。」「多年の塵事、謾りに騰々たり、方袍を著くると雖も道は常に存す。俗に混するも心源は亦昏からず」といひ、白衣を通し、入寂まで山中を出ることがなかつた(景二三)。中にはこのように俗化した仏教の混濁を痛烈に批判し、むしろ破仏を肯定的にみて、反骨を貫いた人もいたのである。

(9) 態度 この未曾有の事件に當つて、禪僧はいかなる心情であつたか、どのような態度であつたか。龜洋慧忠のように仏教の墮落を痛烈に批判した人もいたし、また終南惟政のように、武宗が即位するや隠棲してしまつたように、既に随所にあらわれており、示された態度も多様であつた。棲心藏奘(七九〇―八六六)は明州刺史であつた崔琪の「心鏡大師碑」(金唐文八〇四)の中で、破仏前後の態度を、「くらますも恐わすこと能わず、焚くも熱すること能わず、溺らすも濡ること能わず」と表現し、ものに動じなかつた様を描象的に述べている。徑山洪諲は天命として受けとめ、衆に對し、大丈夫たるもの兒女のごとく悲しむべきでないと諫めている(景一、宋一二)。杭州文喜(八二二―九〇〇)は素服に交ずるも内秘の心は改むるなく(宋一二)韜晦した(景一一)。円仁のように克明な記録があれば別であるが、このような混乱時に、個々の様子まで第三者が記録することは困難で、たとえ記述されていたとしても、多分に文飾を免れない。

以上僅かな資料からも、破仏の与えた影響が決して一様でなく、それぞれに深刻な問題を提起した。付言して今後の検討とするが、湖南・浙江・福建が破仏が激しかったかもしれぬ。禪宗史は破仏以後新しい段階に入つていく。

文部省科学研究費一般研究Cの成果の一部

(愛知学院大学助教授)